

BCS

PRIZE-WINNING WORKS

BCS賞受賞作品探訪記

28

第三四回受賞作品（一九九四年）

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館・丸亀市立図書館及び丸亀駅南駐輪場

前編

一九九一（平成三）年十一月、丸亀市に香川県出身の画家・猪熊弦一郎（一九〇二—一九三三）の作品を収めた美術館と図書館がオープンした。設計者は建築家・谷口吉生氏。前編では、JR丸亀駅前の再開発計画と連動し、まちと一体となる美術館を目指した経緯を紹介する。

城下町の駅前に市民に親しまれる現代美術館を

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館は開館から今年で二四年目を迎え、国内、海外を問わず、アートや建築が好きな人々が訪れる人気スポットになっている。「駅前に建っている美術館」という予備知識をもったうえで訪ねても、JR丸亀駅南口の広場へ出たとたん目に入るダイナミックな構えには、思わずハッとさせられる。

なぜ、駅前に建てられたのだろうか。計画が動き出したのは一九八七年の初めだった。丸亀市は、

収蔵美術品をもたなかったため、香川県高松生まれ、丸亀で幼少期や旧制中学時代を過ごした画家・猪熊弦一郎氏の協力を仰ぎ、美術館を立ち上げるという構想が生まれた。市の考えを説明するために職員二人が東京の猪熊氏のもとを訪れると、猪熊氏は八四歳で洗刺として画業の境地を拓く一方で、美術館のあり方や運営にも明るかった。このときのことを長原孝弘氏が振り返る。「カルチャーショックを受けました。美術館は森や公園の中にあって、人々が襟を正して作品を観るものというわれわれの常識とは違った考えを猪熊先生はお持ちでした。『美術館



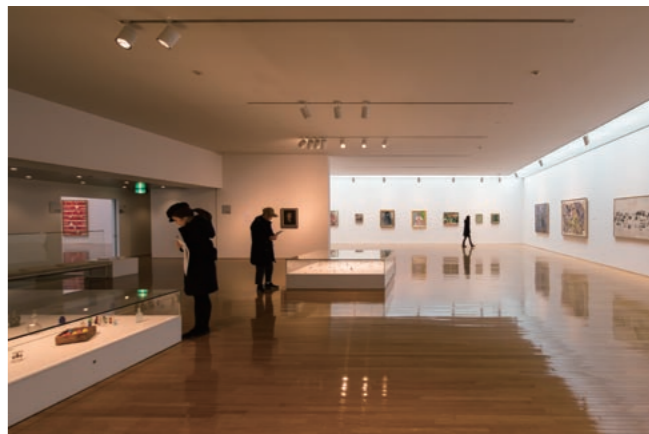
駅前広場に向かって立つ猪熊弦一郎現代美術館の正面。巨大なゲートのようだ。左側は大階段が設置された空間で、まちとつながり、屋上のカスケードプラザまで自由に行き来できる。壁画の前には思い思いに楽しむ人々。壁画の下隅の位置に、エントランスが慎ましく設けられ、その向こうに展示室の空間が広がっている。



丸亀駅南側の広場と猪熊弦一郎現代美術館。広場を構成する要素として、力強い門型を採用し、大きなスケールで設計された。



低く抑えられたエントランスを入ると、1階のエントランスホールと2階常設展示室へ向かう階段。高い天井吹き抜け空間を巡って2～3階に展示室が設けられている。



2階の常設展示室A。猪熊氏の絵画が年に4回ほどテーマを変えながら展示されている。

して、駅前広場の設計は、ランドスケープデザイナーのピーター・ウォーカー氏が担当。美術館の構造体をイメージさせる鉄骨のオブジェがあり、ピンコロ石とアスファルトで描いたストライプ状の舗装が広場から美術館を取り巻くといった連続的なデザインがなされている。

前面の都市に向けて開くゲート状の構造体は、構造設計家の木村俊彦氏との協働によって完成することができたものである。高さ一七メートル、幅二七メートル、奥行きは二二〇メートルに及び、内部は大きく二つの空間で構成されている。右側の空間はたっぷりとした直方体の展示空間で、前面には猪熊氏が描

いた馬の壁画が配されている。左側の空間はまっすぐな大階段で、通行を遮る扉などもなく、広場から伸びる公道と同じく自由に往来できる。階段の先にはホールや造形スタジオ、美術図書館、ロビー、レストランと滝が流れる屋上広場などがあり、展示空間に立ち寄りなくても利用できるのだ。また、ゲートの前面にテラスが広がり、まちと美術館をつなぐ役割を果たしている。訪れる人々の中には、壁画のコミカルな馬たちや、屋外彫刻に戯れるようにして写真を撮り合う姿も見られる。猪熊氏が望んだように、美術館は徐々に市民が日常的に親しむ場となっているのだろう。

は市民の日常生活の中にあつて、人にエネルギーを与えるものだと思います。子供や若者、買い物帰りの奥さんが気軽に入れる難しいくない美術館、まちと一体になった楽しい美術館が本当の美術館だと思います』とおっしゃいました。市が当初想定していた敷地はまさに静かな公園の中だったという。そこで街中で可能性のある敷地を検討した結果、再開発計画が進んでいた丸亀駅前が浮上した。「実現すれば、全国に例のない文化の拠点になるだけでなく、特色があり新しいまちづくりにも貢献

できると考え、用地の取得を進めました」と長原氏。同年秋には猪熊氏の了解と協力を得られることになり、かねてから移転先を探していた図書館と、駐輪場も美術館に併設されることになった。

広場をつくる要素として美術館を設計する

設計者の選定は市長から猪熊氏に推薦を依頼し、建築家・谷口吉生氏を選ばれた。優れた感覚を持ち、これまででない新しい美術館にふさわしい若い世代の建築家に設計を託したいという猪熊氏の思いが込められていた。

「まちと一体となって、人が入っていきやすい建物をつくってほしいというのが猪熊先生と市の要望でした。私は駅前広場を構成する要素の一つとして美術館を捉えることを最も大切なテーマと考えて、設計しました」と谷口氏。市に相談して、都市計画の専門家・加藤源氏（日本都市総合研究所）に参加してもらい、美術館を含む駅前広場全体の再開発計画が立てられた。都市空間の一体化を目指

建築主より

まちと建築と絵画が調和したすばらしい美術館が生まれました



丸亀市猪熊弦一郎現代美術館副館長(当時)

長原孝弘

Takahiro Nagahara

猪熊先生は、ニューヨークでも長年活躍され、海外の美術館事情にも詳しく、高い見識をお持ちでした。初めてお会いしたとき「美術館は道楽息子のようなもので、お金儲けはできません。デパートのように人がどんどん来るところでもありません。それが嫌ならおやめなさい」と言われました。まちと一体の美術館であること、美術館は建物そのものが芸術作品でなければいけないとも言われ、すぐに建築計画を了解されたわけではなかったのです。八七年四月に

瀬戸大橋が開通し、丸亀駅も鉄道が高架化され、不要になったJRの貨物ヤードの跡地が美術館建設用地の中心となりました。用地確保の目的を立て、八七年の秋に当時の堀家市長が上京し、猪熊先生から全面的に協力するという返事をいただきました。私も同席していましたが、「いい美術館をつくりましょう」と二人ががっちり握手をした姿に感動しました。

また、再開発計画の事業主体がJR、民間、市の所管も異なるなかで、加藤源先生が調整役を果たされ、優れた全体計画ができました。しかし南側の大規模商業施設の計画が中止され、全体が実現しなかったのは残念でしたが、広場と美術館の調和が図られ、成果となりました。さらに猪熊先生と谷口先生が対話されたことで、建築と絵画が互いに引き立て合い、調和する空間が生まれたのだと思います。

設計者より

地元の方にもさらに親しまれ成長する美術館のために協力したい



谷口建築設計研究所

谷口吉生

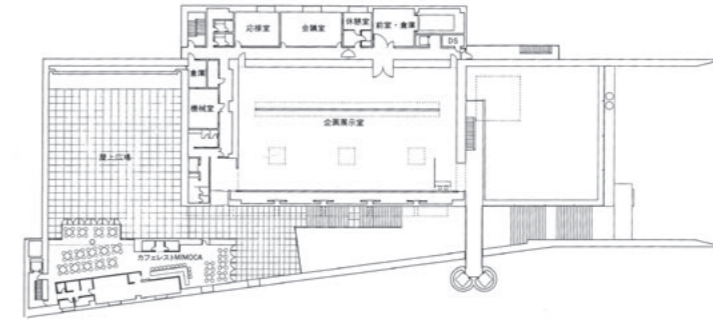
Yoshio Taniguchi

猪熊先生は画家であると同時に、優れた造形家でもあったので、建築家やものをつくる人たちの力をどうしたら引き出せるかをよく知っていました。美術館を設計したときは、ご要望は三つほどで、あとはすべて私に任せるとのことでした。まちと美術館の一体化ということ、おおらかな建築空間をつくること、あとは子供たちの感性が育つような場所にしたいといったことでした。建築の素材や色彩を決めたときなどには、私の方からお願いで、先

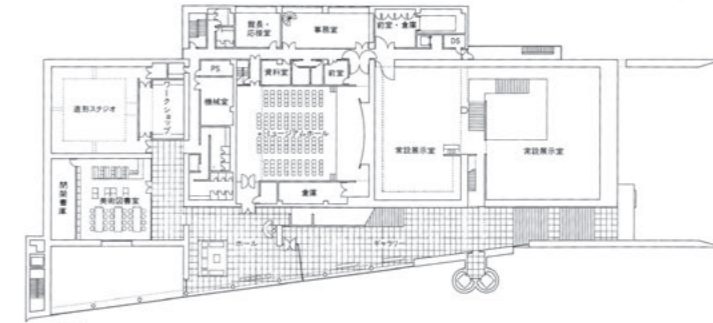
生のお力を拝借していました。このプロジェクトは、丸亀市の方々の支援、多くの施工関係者の努力、設計者も構造、設備、意匠が協働したからこそ実現したものです。

竣工後は美術館の方々が非常に努力されて、質の高い企画展等も開いて、専門家や海外からも高く評価されてきましたが、現代アートと一般市民との距離はなかなか縮まっていないようです。来年は二五周年を迎えますので、これをきっかけに新たなチャレンジをみんなで作るのもよいのではないのでしょうか。じつは猪熊先生は生前に、市民のために世界の現代アートの優れた作品を収集することや、壁画前の大屋根の下でコンサートを開き、ロボットを活用してサービスやコミュニケーションするといった様々な考えも提案されていました。方向を間違えずに更に踏み出せば、今後の美術館の成長につながると思います。

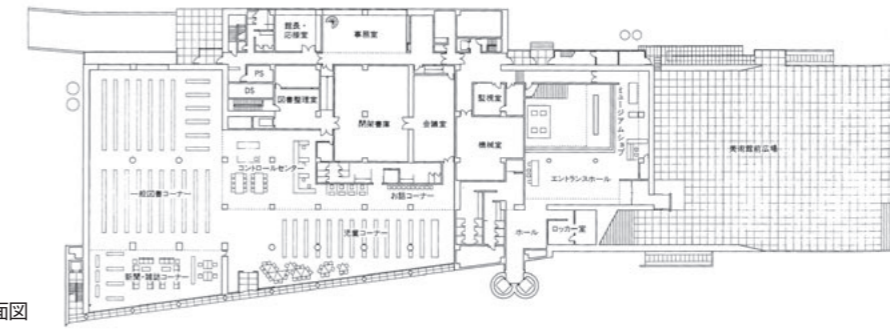
4階平面図



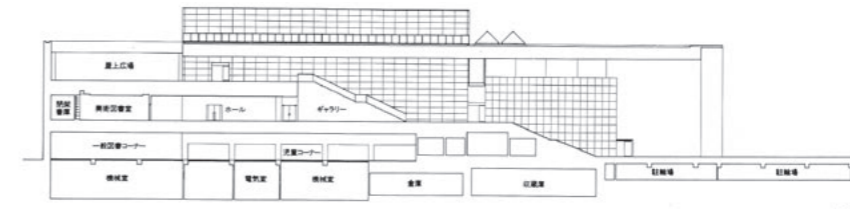
2・3階平面図



1階平面図



断面図



丸亀市猪熊弦一郎現代美術館・丸亀市立図書館及び丸亀駅南駐輪場

丸亀駅南口より徒歩1分
高松空港より リムジンバス約70分
またはタクシー約40分



所在地：香川県丸亀市浜町80-1
建築主：丸亀市
設計者：谷口建築設計研究所
施工者：鹿島建設株式会社
竣工：1991年6月
敷地面積：5,974.53㎡
建築面積：3,603.92㎡
延床面積：11,625.92㎡
構造：SRC造
規模：地下1階、地上4階